

新聞教育における読解力の育成*

～NIE の実践を事例として～

小笠原理徳(学籍番号 200621311)
研究指導教員:平久江祐司
副研究指導教員:大庭一郎

1. 研究の背景と目的

現在の日本の学校教育では、1999年に小・中学校、2000年に高等学校の学習指導要領が改訂され、課題解決、発見能力の基盤として、特に読解力に目が向けられている。もともと読解指導は1950年代後半から盛んに国語教育の中で行われてきた。しかし、OECD(経済協力開発機構)が実施した、生徒の学習到達度調査(PISA調査)の結果から、日本の生徒の読解力の低下が指摘され、大きな問題となった。

本研究では、PISA型読解力の育成の効果的枠組みについて、文部科学省の示した読解力向上プログラムの観点から考察した。

2. 研究方法

本研究では、以下について検討した。

- (1)学校教育における、従来の読解力とPISAの求める読解力の違いを明らかにする。
- (2)PISA型読解力の育成のために、これまでの学習指導要領から教育政策について整理し、文部科学省が示した読解力向上プログラムの特徴と有用性について先進的な事例から検討を行う。
- (3)日本における新聞教育の歴史を整理し、NIE(Newspaper in Education)の事例から効果を考察する。

3. 学校教育における読解力の育成

これからの社会で生きるために必要な能力としての読解能力を明らかにする目的で、学校教育における従来の読解力とPISA型読解力の違いを比較した。

学校教育における従来の読解指導の特徴として、作品理解だけでない生活に密着した読みが期待されたものの、結果として文章に対する客観的評価が必要とされなかったことが指摘できた。

それに対して、OECDが提唱したPISA型読解力は様々な目的のために書かれた情報の理解、利用、熟考を含み、実生活に必要なとされる能力である。

従来の日本の国語教育における読解指導は、テキストが文学的文章に限られること、テキストの客観的評価が求められないこと、また知識の暗記だけではない活用の姿勢や、文章を批判的に読むクリティカル・リーディングの観点が不足していることがわかった。

4. 読解力向上プログラムの分析

PISA型読解力の育成のために、これまでの学習指導要領から教育政策について整理し、PISAショック後に文部科学省が示した読解力向上プログラムの特徴と有用性について検討を行った。

読解指導に関わる国語科は「国語」を正確に理解し表現する能力の育成に偏ったことが指摘できた。

PISA型読解力育成のために文部科学省から出された、読解力向上プログラムと読解力向上に関する指導資料を分析したところ、(1)各指導例の事後評価がないこと、(2)学年・能力毎のレベルの設定がないこと、(3)教科型読解力がないこと、(4)各指導例が体系化されていないことがわかった。

また、各指導例の教科毎のカリキュラムや、学習指導要領との関連が不明瞭であるために、読解力向上プログラムには、読解力の育成に行き届かない点があるといえる。

5. 読解力育成に関する効果的な事例の分析

読解力の育成事例として、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校のFYプロジェクトに着目し、プロジェクトの報告書と指導例を分析した。その結果、(1)教科型読解力が示され、カリキュラムに従った読解力の育成が行われていること、(2)各指導案の授業時間数は様々であるが、体系化され、普段の授業の中に組み込まれていること、(3)到達レベルの設定はないが、評価について示されていることがわかった。

6. 新聞教育とNIEの可能性

PISA型読解力の育成に関する新聞教育を考察する目的で、日本における新聞教育の歴史を整理し、NIE活動の事例を分析した。

* “Improvement of the Reading Literacy in the Newspaper Education” by Riho OGASAWARA

新聞教育の活動は古くから行われてきたものの、大きな広がりは見られなかった。それに対し現在のNIEは従来の新聞教育よりも組織的で、実践の共有だけでなく、NIEの理論構築など、新たな新聞教育を切り開く活動に位置づけられることがわかった。

また、新聞教育とNIEの相違点として、新聞を1面から最終面まで、記事や写真、広告まで丸ごと活用するために、切り抜き記事の利用以外の新聞の様々な活用が可能になることが挙げられた。さらに、新聞を複数紙活用するために、比較読みを行い、紙面の視点や真偽を考えられるため、NIEは多角的な読みに対応したテキストを扱う教育活動といえる。したがってNIEは、PISA型読解力の育成の効果的な実践が可能であると考えられる。

7. NIE事例集の分析

NIEの推進側が期待する現在の実践について明らかにする目的で、NIEを初めて行う教師が使うであろう代表的なNIE事例集の分析を行った。

その結果、NIEは読解力の向上に対して一定の効果は予測されるが、目標が情報の理解どまりであったり、批判的読みに触れないなど、新聞を活用する以前の、新聞に親しむから発展していない面があることが明らかになった。また、読解力向上プログラムと同様、各事例の体系化や、カリキュラムへの組み込みが示されておらず、授業の一手段としてのNIEは未だ不十分であることがわかった。

8. 考察

8.1 テキストの特性をふまえたNIEの学校カリキュラムのための指針が必要

NIEは様々な形式のテキストからなる新聞を丸ごと使う活動であるため、多様な実践が行える。そのため、活動と効果の関係を考慮することがより重要である。実践の助けとなる指導のガイドや手引きは、新聞社や教育委員会によって作成されつつある。それらのほとんどがテキスト内容を重視した構成であるため、新聞を読むことを主眼として考えることができる。しかしNIEを教科で行う場合、新聞内容を読むだけでなく、テキストの内容や形式と、科目の特徴や授業など学校のカリキュラムとの関連が必要である。NIEはPISA型読解力の育成に効果があると考えられるが、単に新聞を活用するためではなく、授業で明確な学習効果を得られる活動にするために、教科毎のNIEのカリキュラムの指針を作成する必要がある。

8.2 読解力の育成プログラムにおける評価の観点を明確にすることが必要

文部科学省の読解力向上プログラムや、NIE事例集では、事後評価に関する記述が曖昧であった。NIEで活動の評価方法が明確に示されていないければ、販売促進が目的だと非難される原因にもなりかねない。また、読解力向上プログラムは教科内での読解力の育成を求めているが、カリキュラムへの組み込み方や、到達レベルが示されていないために、読解力の継続的、発展的な育成が行われないと考える。“読解力について何となく考えた授業”にしないために、授業評価やカリキュラムへの組み込み、到達レベルの設定が不可欠である。

8.3 クリティカル・リーディングの観点が不足

読解力向上プログラムや、FYプロジェクト、NIE事例集において、批判的に物事をとらえることや、その上で自らの意見を作る必要性が言及されている。しかし実際のPISA型読解力と比較すると、従来の読解力観から抜け出せていないと考える。批判とは批評して判断することだが、日常では対象への否定的見解や、懐疑的な見方での判断という意味で使われやすい。しかし、批評し判断することは、対象を中立的に分析、価値判断、説明することを意味する。中立的に分析することと、対象に否定的な感情を持つことは別であると認識した上で、クリティカル・リーディングの観点を重視することが読解力の育成において必要であろう。また、NIEの場合は、実践の内容が新聞活用に偏っていることが指摘できる。新聞活用では、新聞自体の評価や、記事の制作プロセスは視野に入れないことが多い。したがってこれらの活動を含めた、新聞を対象とした活動を重視することが、クリティカル・リーディングを意識した活動につながると考える。

9. 今後の課題

今後の課題として、テキストの特性をふまえたNIEの活動の手引きの作成を行うことが挙げられる。それを作成した後に、PISA型読解力の育成のための手引きを作成することが可能になると考える。

文献

- [1]石山修平. 特集, 読解指導: 「読み」と「わかること」の基本問題. 実践国語. 1953, vol. 14, no.158, p.6-12.
- [2]文部科学省. 読解力向上プログラム. 文部科学省. (オンライン), 入手先(URL:http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/014/005.htm), (参照 2008-1-15), 2005